KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

関西外大-バックネル大学Facebookプロジョクト2009：Facebookを使った実践的コミュニケーションの試み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): コミュニケーション活動, Facebook, SNS, e-mail交換, コミュニケーションの手段 キーワード (En): 作成者: 日木, くるみ, Armstrong, Elizabeth メールアドレス: 所属: 関西外国語大学, バックネル大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006152

関西外国語大学 研究論集 第92号（2010年９月）
Journal of Inquiry and Research, No.92 (September 2010)

関西外大―バックネル大学 Facebook プロジェクト2009

――Facebookを使った実践的コミュニケーションの試み――

日　木　くるみ
Elizabeth Armstrong

要　旨

本稿は、2009年度に行われた、関西外大生と Bucknell 大生間のコミュニケーション活動（Facebook プロジェクト）を報告するものである。2003年から2007年までの５年間、国際言語学部のゼミナールⅡ（日木ゼミ）を履修した３年生と、アメリカの Bucknell 大学で日本語を履修した学生が、e-mail で意見交換をしてきた。しかし、学期中に４回ほどしかメール交換ができない、写真や画像が送れないなど、かなり制限される点があった。そこで今回は、Facebook という新しい SNS を使用し、コミュニケーションを実践した。その結果、Facebook を使うことで、学生は好きなだけ意見交換をし、写真や画像なども自由に post することが可能になった。課題として残ったのは、自分の意見を post して終わるのではなく、互いの意見交換を活発にしていくことができるように、学生を指導していくことである。

キーワード：コミュニケーション活動、Facebook、SNS、e-mail 交換、コミュニケーションの手段

１．はじめに：Facebook プロジェクトの背景

本稿は、2009年度に国際言語学部のゼミナールⅡで行った Facebook プロジェクトについてまとめたものである。

2003年以来、授業で実践的なコミュニケーションを行えないかと、ゼミナールⅡで e-mail プロジェクトを行ってきた（日木・Armstrong 2005）。それはゼミナールⅡを履修している３年生と、アメリカの Bucknell 大学で日本語を履修している学生が、e-mail を使ってコミュニケーションを図るというものである。Bucknell 大学の教員である Elizabeth Armstrong が日本滞在のため実施できなかった2008年を除き、この試みは2007年まで５年間続いた。E-mail プロジェクトは学生の「もっと相手のことを知りたい」という学習意欲を高めたが、同時に課

題もあった。例えば、mail 交換の回数が 1 学期に 4 回と限られていたため、より多くの mail 交換をしたかったなどの意見が、学生からあったことなどである。そんな中、Elizabeth Armstrong より、Facebook を利用してはどうかという提案があった。2 節で説明するように、Facebook であれば、E-mail プロジェクトの課題を解決できるのではないかという期待があった。教員たちも初めて使うツールであったが、授業で使用する場合、どのような可能性があるかを探るため、試してみることにした。

2．Facebook プロジェクト概要

2.1 E-mail プロジェクトでの課題

2004年度に実施した E-mail プロジェクトでは、ほとんどの学生が学習意欲を高めたと肯定的な感想を述べていた。その一方、以下のような課題も残った。

(1)　メール交換する学生数が関西外大と Bucknell 大で偏りがあったこと。

(2)　他の組のメール内容を見ることができないこと。

(3)　メール交換の回数がかなり限られていたこと。

(4)　教員の仕事が煩雑であったこと。

(5)　写真や動画を送る際に制限があったこと。

まず(1)に関しては、日本語で読み書きができるレベルのアメリカ人大学生が少ないため、関西外大生 3 名と Bucknell 大生 1 名が 1 組になった。合計 6 組ができ、その組の中だけでメール交換をした。アメリカ人学生の中には、複数の日本人から送られてきた日本語のメールを読み込むのが負担になり、メール交換を中断する者も出てきてしまった。一方、日本人学生の何人かは、相手からメールが来ないことにかなりのフラストレーションを感じていた。

(2)は、(1)で述べたように、関西外大生 3 名と Bucknell 大生 1 名の組の中だけでのメール交換だったため、他の組ではどのようなメールを交換しているかが分からなかったということである。その点を補うため、授業ではそれぞれの組がメール交換の内容をまとめて発表したが、学生達が全てのメールを実際に読んだわけではない。より多くのメールを交換できれば、もっと直接的に言語・文化を学ぶ機会が増えたであろう。

(3)は、アメリカと日本では学期の時期が異なり、メール交換が 4 回と少なかったという点である。両大学の授業が同時に行われているのは、9 月から12月の 4 ヶ月であるが、9 月も12月も授業回数が少ないため、実質のメール交換の回数はかなり限られた。4 回の内容は、自己紹介、相手側の文化や言語についての質問、相手側からの質問への返答、お礼、であった。プロジェクト終了後、学生からはメール交換の回数を増やしてほしいという要望がでた。

(4)は、メール交換を成績の一部に組み込んだため、各学生が期日までにメール送信をしたかどうかを、各教員が逐一チェックしなければならなかったということである。学生には、メール交換の相手と教員2人に同じメールを送信することを求めていた。しかし、このメールチェックが予想以上に煩雑であった。期日を待たずにはやばやとメール送信を行う学生もいれば、期日ぎりぎりに送信する者、期日を過ぎてからメールを送る者など、学生1人1人のメールチェックに思った以上に時間がかかった。また、メールを送信したものの教員には届いていなかったり、相手には送信したものの教員には送らなかったり、技術面の問題なのか学生のミスなのか判断に困り、学生本人に確認しなければならないこともあった。

(5)は、e-mail の技術的な問題であり、メールで写真や動画を送る際に制限があったということである。メールで写真などを送ると、相手側が受け取るときにかなりの時間と容量が必要となり、好きなだけ写真を送るという訳にはいかなかった。また、メールで動画を送ることができなかったため、動画の自己紹介は各教員がビデオカメラで録画し、相手に郵送した。

2.2 Facebook を使用する動機

Facebook（フェイスブック）は、Facebook, Inc. の提供する SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）である。この SNS では、account を作った人が自分の認めた人だけをグループに入れ、そのグループ内で意見交換することができる。

今回の Facebook プロジェクトでは、Elizabeth Armstrong が認めたメンバーのみがグループに入ることができるようにした。必然的に、Facebook プロジェクトに参加している関西外大生と Bucknell 大生のみがグループに入った。グループメンバーとして認められれば、意見交換の回数は限られず、誰がどのような内容を掲示しているか自由に読むことができ、写真や動画も好きなだけ載せることができる、といいことばかりである。全員参加のディスカッションが可能な SNS なので、関西外大生と Bucknell 大生を組にする必要もない。教員もメンバーに入っているので、教員が自由な時間のある時に、学生達の意見交換を読むことができ、学生の意見交換を追っていきやすい。Facebook を使うことによって、E-mail プロジェクトで明確になった課題に対応できるとの期待があった。

2.3 目的

Facebook と E-mail は上記のようにコミュニケーションの仕方が異なるが、Facebook プロジェクトで目指したものは E-mail プロジェクトと同様であり、以下の3点である。

(1) 目標言語によるコミュニケーションを実践する（目標言語で文を書く）

(2) お互いの文化を知る

(3) 学習意欲を高める

2.4 参加者

今回参加したのは、関西外大で日木ゼミⅡを受講している大学3年生26名とBucknell大で日本語を受講している35名である。Bucknell大学では、日本語履修者はJapanese Ⅰ, Japanese Ⅱ, Japanese Ⅲ, Japanese Ⅳ, Japanese Ⅴを順次とるようになっている。Ⅰ～Ⅴはそれぞれ日本語のレベルを表し、学年とは関係がない。Ⅰ, Ⅱは基礎レベルの日本語で初心者対象であり、数が大きくなるほどレベルがあがる。Japanese Ⅲの学生は簡単な文を読むことができ、Japanese Ⅴではかなりの日本文を読むことができる。今回のプロジェクトに参加したBucknell大生35名の内訳は、Japanese Ⅰの履修者が5名、Japanese Ⅲが5名、Japanese Ⅴが25名である。

2.5 期間、内容、確認事項など

Facebookプロジェクトを実施した期間は、2009年の10,11月の2ヶ月間であった。前述したように、両大学の授業が同時に行われている期間がこの2ヶ月間であったためである。

内容は、(1)就職活動について、(2)日本で流行っているsocial networkについて、(3) social lifeについて、(4)好きなことについて、という4つのトピックに絞った。(1)と(2)は教員が話し合い、両大学生共通の話題になるだろうと考えた内容で、(3)はBucknell大生が、(4)は関西外大生がそれぞれ決めた内容だった。10月の初めの週は自己紹介にあて、(1)から(4)のトピックはそれぞれ約2週間かけた。

確認事項として、主に4点ほど学生に伝えた。まず第1にFacebookの登録方法、第2にFacebookに意見を掲示する際にすべきこととしてはいけないこと(DOS AND DON'TS)、第3に使用言語、そして第4にこのプロジェクトをどのように成績に含めるか、という点であった。

Facebookへの登録方法として、以下の3ステップを示した。

Step 1. log in to Facebook.

Step 2. type in "2009 BU-KG Exchange Group" in the search box at the top right.

Step 3. When you get to the group page click on the "ask to join" (or words to that effect) button.

DOS AND DON'TSに関しては、下記の内容を提示した。

DO contribute to the discussion at least once for each topic (1 time/2 weeks)

DO offer your candid opinion about topics and offer constructive questions to the group.

DON'T make sweeping generalizations about "all Americans" or "all Japanese". Pose your comments so they reflect yourself and your perspective.

DON'T use slang or abbreviations. To promote optimum understanding in the group write in standard language with careful attention to spelling and grammar.

使用言語については、関西外大生と Bucknell 大生では条件が違った。関西外大生は 2 グループに分け、グループ 1 は10月には日本語を11月には英語を使い、グループ 2 はその逆で10月には英語を11月には日本語を使うようにした。このようにすることで、Bucknell 大生から見れば、プロジェクト進行中、日本語と英語で書かれた関西外大生の意見が常にあることになる。Bucknell 大生の Japanese Ⅰを履修している学生は、日本語を学習して間もないため、自己紹介だけは日本語で書き、その後は英語で書いてよいことにした。Japanese Ⅲ と Ⅴの学生には日本語で書くことを勧めた。こうすることで、関西外大生もまた、常に日本語と英語で書かれた Bucknell 大生の意見を読むことができた。

成績への含め方としては、各トピックに最低 1 回の意見を掲示すれば、所定の点数を獲得できることとした。

3．具体例

ここでは、意見交換が活発に行われた例とそうではない例を中心に、学生の意見を実際に見ていきたい。学生の書いたものは、間違いも含めてそのまま載せた。

3.1 学生同士が活発に意見を述べた具体例

学生がいちばん活発に意見を述べていたのは、就職に関してであった。最初のトピックということもあったかもしれないが、最多の49 posts であった。まず、関西外大生が書いたものを 4 例ほど見てみよう。

(a) Japanese University students start "job hunting" when they are juniors. At the beginning of their job hunting, they contact a lot of companies to get information and apply again to get an interview. I heard American job finding system is pretty different.

(b) 日本では、企業に就職するために面接以外にもいろんな採用試験を行います。例えば、SPI という筆記テストやテストセンターというパソコン版のテストです。また、人気企業には多くの受験者が応募します。今までの紙ベースの採用テストでは膨大な費用と手間がかかります。なので最近では、パソコンを使ってインターネット上で受験する Web テストを導入する企業が急増しています。私たち就活生は、このようなテストの対策もしてい

かなければいけません。アメリカの採用テストにはどういったものがありますか？

(c) 日本では、新卒でなければ就職活動はとても難しくなります。だからみんな必死に就職活動をしています。決まらなかった場合、就職のために、単位が足りているにもかかわらず留年したりする場合もあります。中国では逆に新卒だと就職がむずかしいみたいですね。アメリカではどうですか？

(d) Nicolle and Katie, thanks for the informations.
In our case, going to graduate school is not always a good idea to get a job, because companies want fresh air in their space (but high school kids are too young). The cases that is a good idea are if you study science or if you want to become a professor. I was really surprised when I heard a debate coach of my American friend quit his job to go to a graduate school and that's because he is afraid of losing his job and if he goes to a graduate school he can step up and keep the job long time.

他の関西外大生も、就職活動は厳しいとの内容を書いていた。
それでは、Bucknell 大生がアメリカの状況について書いた 2 例を見てみよう。

(e) For the American job system, you can start job hunting in senior year of college. You submit your resume and the company will contact you for an interview if they are interested in hiring you. Of course, to be considered, you need to have a lot of experience, such as an internship. Also, many people go to graduate school to have more qualifications.

(f) こんにちは！　日本では、仕事を見つけるのが大変そうですね。私のせんもんは音楽ですから、仕事について別に分からないけど……．でも、アメリカの経済が悪いので、たくさん学生は仕事を見つけるに対して、大学院に行きます。それでは、申し込む学生が多いから、大学院に入れるのが難しくなりました。音楽の仕事は、いろいろな音楽ができると、やさしければやさしいほど、仕事をみつけます。（ジャズとか、ブロドウェイとか。）クラシカルばかりできる音楽家は、仕事をみつけるのがとても難しいと思います。たから、卒業の後、大学院でほかの音楽を勉強したいんですが。日本語の間違えて、すみません！
○○の英語はとても上手ですよ！英語のフレイズをよく知っていますね。

アメリカでも不況のあおりを受け、雇用状況が厳しくなっており、インターンシップが採用の際に大切になってくること、大学院に進学する学生が多いことなど、日本に似た状況であることが分かる。学生アルバイトでさえ見つけるのが大変な状況であることを伝えるものもあった。

Bucknell 大には、アメリカ人以外にも、中国、スリランカ、フランスから来た学生がおり、それらの国の状況も記述されている。その具体例を見てみよう。(g)では中国、(h)ではスリランカ、(i)ではフランスの状況がそれぞれ書かれている。

(g) 御免なさい、私は日本と米国の就業の情況を知りません。だから、中国の大学の卒業生の就職の情況を紹介します。

It's very difficult to find a job in China now. No companies want to hire an applicant who just graduate from college without three to five years working experience.

（同じ学生により後日書かれたもの）

I wonder why Japanese companies like to hire new graduates. Do they ask for low-wage? If not, what are the advantages they have? Creative mind? It's so pity that most of Chinese companies are not interested in this point. The employers just want skilled labor who ask for low wage.

(h) The effects of economic meltdown is very apparent in the US as most graduates going out of college find it extremely tough to find jobs. The global effects of the economic meltdown can be seen as even part time jobs are tough to find back in Sri Lanka. Most of my friends back in Sri Lanka are in a bad situation as most firms are trying to cut down on costs.

Going to graduate school is a very high probability for me as I am a physics major and having Master's degree is very helpful in doing well in this career path. Hopefully by the time I'm out of graduate school this economic crisis would be resolved.

(i) Having arrived here in the U.S. only 2 months ago, I really have no clue about the state of the country's job market. However, from what I have read so far, I can tell that it sounds very similar to what is going on in France. I struggled to find a job this summer, which was very unusual and infuriating. Right now, I would say that finding a job in France is very difficult, especially if you are growing old (nearing retirement, that is - meaning, over 45 years old) or if you have just graduated from university.

少なくとも、このプロジェクトに参加している学生の母国に関してはいずれも、就職が大変であることは共通しているようである。一方、日本の状況とは大いに異なり、中国やフランスでは大学新卒者がすぐ採用されることは難しいことが分かる。それぞれの国の類似点・相違点が分かって面白い。

就職以外のトピックで学生の posts が活発だったのは、漫画についてであり、20posts あった。「好きなことについて」というトピックの中で、以下のような漫画についての意見が Bucknell 生からまず載せられた。

> 漫画を読むのが好きなので、漫画について話したいんです。私は五さいの時、ドラえもんを読みました。それからずっと日本の漫画が好きです。少女漫画がたいてい読みますが、少年漫画も好きです。一番好きな漫画はドラえもんです。最近風光という漫画を読んでいます。
> みんなはどんな漫画が好きですか。人気がある漫画はどんの漫画と思いますか。
> 教えください。

それに続き、Bucknell 生も関西外大生も自分の好きな漫画や漫画家の話で盛り上がっているようであった。3 例ほど返答を見てみよう。

> 私も漫画が大好きです。絵を描くのも好きです。私の姉は漫画家で、時々手伝いをします。
> Kristin さん、私も小畑健さん好きです。とても絵がきれいですよね。
> Coutney さん、漫画をかくんですか。ぜひ一度見てみたいです。（関西外大生）

> I love Manga too. Especially, I love ONE PIECE. It is pirates and good friendship story!!!!!
> I recommend it to you.（関西外大生）

> 私も漫画が大好き！でも漫画の中に古い漫画は一番好きなのです！ユーニークな描き方は面白いと思うので。日本にいたとき、「いたずらなキス」という漫画を読みました。日本語で読みにくかったが、楽しかったです！　今時間がないので、時々英語で読んでしまいます。残念ですね。漫画を読むことはいい日本語の練習でしょう。（Bucknell 大生）

日本でもアメリカでも、大学生は漫画が大好きなようである。日本のアニメに魅力を感じて、日本語を履修するアメリカ人学生が多いとも聞いた。このことを考えれば、このトピックで盛り上がるのは当然と言えるかもしれない。

3.2 学生同士のコミュニケーションがうまくいかなかった例

学生間の意見交換が活発に行かないこともあった。例えば、Bucknell 大生が音楽や料理などについて意見を載せ、好きな音楽のことや、鮨は普段食べるものなのかなどと聞いたが、両大学の誰も返答していなかった。音楽について post した学生は、誰も返答しないのでがっかりしたと意見を述べている。

なぜうまくいかなかったのかという原因を特定するのは難しい。トピックが面白くなかったのか、教員の指導に問題があったのか、学生達が試験などで忙しかったのか、または複数の要素が重なったのか、など色々考えられる。教員たちの同じ指導のもとで、コミュニケーションが活発になっているトピックもあることから推察すると、トピック選択とその他の要因が影響しているのかもしれない。

Facebook プロジェクトで、よりよいコミュニケーションを行うために、考えるべき点としては、以下のようなものがあると思う。

- 互いに興味がもてるトピックの選択
- 相手に対する強い興味
- プロジェクトが進むにつれて、新鮮味が薄れることへの対処
- 試験やレポートのため、学生がプロジェクトに集中できない時期の対処

今後は、これら１つ１つに対し、丁寧に対応していくことが大切だと思われる。教員があまり指導しすぎると、学生達が依存してしまうことも考えられるので、学生自身がこれらの問題への対処方法を考えるような機会を持っていきたいと思う。

４．参加者の感想

4.1 関西外大生の感想

このプロジェクトを終えて、関西外大生に良かった点と悪い点を書いてもらった。
肯定的な意見として、いちばん多かった意見は、外国の状況や文化のことを知れたこと、であった。表現はそれぞれ異なるものの、26名中24名がこの点に言及している。学生が実際に書いた意見をいくつか見てみよう。

- 普段の生活では聞けない同年代の外国の学生の意見をたくさん聞ける点では、すごくよかったと思います。
- Facebook の感想は、アメリカ人の考え方や制度ではなくいろいろな国の人と交流できたのがとても面白かったです。

- アメリカの学生の生の声が聞けたこと。経験がないと就職できないというのがいちばん衝撃的でした。
- 海外の就職状況や流行っていることなど知れてとても面白かったです！！！特に就職が厳しいのは世界みんな一緒だと思うと元気がでました！！！
- どこの国で暮らしていても、好きなことや、就職が難しいことが分かった。みんな大変でそれぞれ努力をしなければならないんだと思った。

その他にも、英語を使えてよかったという意見や、外国人が日本や日本人をどう見ているのかなどが分かった、という意見も少数ながらあった。
否定的な意見で多かったのは、次の３つである。

(1)　自分の意見を書いて終わりになっており、ディスカッションになっていない。
(2)　トピックが多く、どれに対して書いたらよいか分からなくなった。
(3)　Facebook の使い方など、技術的な問題があった。

相手に興味を持つところからコミュニケーションが始まると考えれば、(1)は、学生が持つ大きな課題を明確にしているのかもしれない。教員としても、学生１人１人に、お互いの意見交換が重要であることを意識させることが、必要になってくるように思われる。どのようにトピックを深めていくのか工夫をさせ、それを学生間で話し合わせるというのも１つの案である。Post する側は、どのように書いたら相手が返答したくなるかを考え、読む側は、相手の意見に対してもっと興味を持ち、質問する大切さを意識すべきであろう。学生の中には、誰の post に対する返答か明記している者もおり、そのような返答を受け取った学生は嬉しいだろうと思う。このプロジェクトは、今後の指導いかんで、異文化の相手を深く知る方法を、コミュニケーションを実践する中で試すことができる、数少ない機会になると思われる。

(2)は、「好きなことについて」というトピックのところで、各学生が自分の好きなことについて話し始め、複数のトピックが同時進行で話された。関西外大生は、どのトピックに対して意見を載せるべきかと困惑してしまったようだ。これも、今後どのようなトピックで話し合いを進めるべきか、教員間で話し合いを詰めることで解決できるように思う。

(3)に関しては、このプロジェクトを始めるにあたって、Facebook を使ったことのない学生に集まってもらい、Facebook の log-in 方法など簡単な操作を指導した。読み書きという点で問題はなかったものの、写真・動画の載せ方が分からなかった学生も少数おり、事前のさらなる指導が必要なのかもしれない。すでに今回の学生が Facebook を使っているので、後輩に指導させるのも１つの方法であると思う。
また、Facebook プロジェクトが進むにつれて、今まで log-in できていたものが急にできなくなる学生が 2, 3 名いた。再度登録をし直して、Armstrong がその学生達を受け付けることで、

プロジェクトを続けることができた。なぜそのようなことが起こるのか分からないが、次回からはその様なことが起こった場合の対処方法を事前に伝えることで、学生の不安が軽減できると思う。まとめると、(1), (2), (3)はいずれも、担当教員たちの今後の指導で、解決できる課題だと思われる。

4.2 Bucknell 大生の感想

Bucknell 大生も概ねプロジェクトに対して肯定的な意見を持っているようだ。肯定的な意見で一番多かったのは、以下のように日本人の意見を読めて楽しいというものである。

It was interesting to read the Japanese student's comments, although somewhat challenging, and see the differences in opinion and/or perspectives between Japanese and American students.

また、Facebook Project を通して、日本人学生との共通点を見出している学生も多くいた。実際の意見を 2 つほど見てみよう。

We posted about ourselves and our hobbies, likes and dislikes. It seems like manga and anime were a common interest for many of the participants, American and Japanese alike, which was nice because we then had a commonality to talk about. We also discussed movies and film as well as the Japanese school system to some degree.

I posted about favorite Japanese drama. I listed the drama that I enjoyed and other people replied and recommended other dramas. I watched one of them which I really liked. I also replied discussion topics that Professor Armstrong posted. One thing that I've learned was that although I live in different environment from those who comment, but they share concerns with me such as finding a job.

否定的な意見もいくつかあった。主な批判的意見をまとめると、以下の 2 つにまとめられる。

(1) 日本語を学び始めた学生にとっては、日本語を読んで理解することが難しいこと

(2) Discussion に発展せず、自分の意見を一方的に言って終わってしまったこと

(1)に関して、ある Bucknell 大生は次のように述べている。

I posted mainly about my experience at an American University and about the common

problems and goings on of the area I live in. I read other posts and found their English typically easy to understand. It was a bit sad when I saw complex Japanese posts that I couldn't read. I was fine with the fact that I have not studied long enough to read them, but I was always curious to know what they said and what possible insights they had to offer. I did not respond to any particular posts, but I did try to read the posts of my classmates so that I could provide new information as opposed to repeating an old idea. I thought the experience was very interesting and would enjoy doing it again.

他にも日本語学習歴の浅いと思われる学生が、似たような意見を述べていた。

(2)に関しても、実際の意見を見てみよう。

I posted when asked, but found myself not returning otherwise. A lot of posts were not reactions, just peoples' own statements. It would have been more interesting if people responded to particular posts to start a conversation. When I wrote my posts I would look through previous posts and try an tie my response in with those comments. I liked the comments by Japanese students and that I could reply in English.

この学生が述べているように、Facebook を使って、ディスカッションを深めるような指導を今後行っていく必要がありそうだ。

その他にも、音楽のことについて意見を述べたが、誰も返答しなくてがっかりしたとか、最初はやる気満々だったが時間と共に怠けてしまった、などの少数意見もあった。

5. Facebook プロジェクトの意義と課題

5.1 Facebook プロジェクトの目標は達成したか

Facebook プロジェクトには以下の 3 つの目標があった。

(1)　目標言語によるコミュニケーションを実践する(目標言語で文を書く)

(2)　お互いの文化を知る

(3)　学習意欲を高める

(1)に関しては、学生たちは自分の意見を Facebook に載せており、目標言語でコミュニケーションしたという点では、目標は達成できたと思う。ただし、意見を活発に交換し合い、ディスカッションを深めていくという点に関しては、今後の課題として残る。(2)では、学生の多くが相手や相手の文化が知れてよかったと述べており、この目標も限られたトピックの範囲内ではあるが、達成できたといえる。(3)に関しては、多くの学生がこのプロジェクトを楽しん

だという意味では、かなり達成できたと言える。しかし、語学の勉強になった、さらに語学を学びたいという語学に関連した意見は少数であった。もしかしたら、学生たちは目標言語の形式よりも、内容に焦点を当てていたためかもしれない。実際のコミュニケーションにおいて、コンテント重視の体験は意味あることではないかとも思う。

5.2 E-mail project と比較して Facebook の利点と課題

E-mail project には前述したように、以下の課題があった。

(1) メール交換する学生数が関西外大と Bucknell 大で偏りがあったこと。
(2) 他の組のメール内容を見ることができないこと。
(3) メール交換の回数がかなり限られていたこと。
(4) 教員の仕事が煩雑であったこと。
(5) 写真や動画を送る際に制限があったこと。

Facebook では、以上すべての課題をクリアすることができた。今回のプロジェクトでは Bucknell 大生が35名、関西外大生が26名と学生数に差があったが、全員参加型の SNS なので、数の差が気になることはあまりなかった。また、メンバーすべての意見を全員が見ることができるし、何回でも好きなだけ意見を載せられるので、(2)と(3)の課題もクリアできた。また、教師が時間のあるときに、学生の意見を見ることができるため、E-mail プロジェクトのときほど教師の仕事は煩雑ではなかった。写真や動画も好きなだけ乗せることができる点で、e-mail とは大きく異なる。このように、Facebook はコミュニケーションツールとして、今回のようなプロジェクトには向くようである。

最後に、Facebook プロジェクトの課題を挙げたい。今後、一番改善すべき点は、学生同士がトピックに関して意見交換を深化させるように、教員の指導を考えていくことであろう。今回のプロジェクトでは、全く返答のないトピックもあったが、漫画やアニメなどのように両大学生が共通して興味を持っているトピックもあった。相手の興味を引き出し、会話を深めていく工夫を学生が試してみて、それをクラスで話し合うのもいいかもしれない。異文化コミュニケーションを成功させるために、自分に何ができるかを考えていくことは、コミュニケーション学部に在学している意義にもつながるのではないだろうか。コミュニケーションには必ず相手がおり、双方の興味などがある程度満たされないと、会話を発展させることは難しい。そのようなことを経験できる良い機会になったプロジェクトだったと感じる。

第 2 に、学生が Facebook を使えるように、技術的な面で指導していくという点も挙げられる。写真や動画の載せ方なども丁寧に指導していく必要を感じた。

最後に、E-mail プロジェクトでは語学力の違いを考慮に入れて、日本語初心者は含めなかっ

た。しかし、そうすると関西外大生とBucknell大生の人数差が広がり、うまく意見交換がいかなかったことがあった。それを考えると、Facebookプロジェクトでは日本語の初心者でも、英語で書かれた意見は読むことができ、参加することができた。その点では大きな進歩だと考える。しかしながら、日本語を始めたばかりのBucknell大生の中には、内容を知りたいのに、わからないのでがっかりしたという意見をもつ者もいた。解決策として考えられるのは、日本人学生は母国語と目標言語を両方書く、ということが考えられる。そうすることで、相手の誤解を避ける可能性が高まり、かつ、目標言語の練習量も増える。しかし同時に、両言語で書かないことで、日本語がかなりできるBucknell大生が、日本語を読み取る練習になるかもしれない。どちらがよいかを選ぶのは、難しいところである。今後も試行錯誤を繰り返しながら、決めていくことかもしれない。

参考文献

日木くるみ　Elizabeth Armstrong 「関西外大ーバックネルE-mailプロジェクト2004」『関西外国語大学研究論集』第82号、2005年、175-190頁。

（ひき・くるみ　国際言語学部教授）
（Elizabeth Armstrong　Bucknell University）